

錢形平次捕物控

荒神簪

野村胡堂

青空文庫

一

「錢形平次親分といふのはお前様かね」

ちうねんばい

中年輩の駄馬ぬのこに布子ぬのこを着せたやうな百姓男が、平次の家の門

口にノツソリと立ちました。

老ふけてゐるのはその澁紙しぶがみ色に焦やけた皮膚のせゐで、實は三十

五六をあまり越してゐないかもわかりません。油氣のない髪わらを藁

しべで結つて、月代さかやきは伸び放題、従つて熊の子のやうな凄まじ

い髯面ですが、微笑すると眼尻に皺が寄つて、飛んだ可愛らしい

人相になります。

「錢形の親分は奥にあるよ——俺は子分の八五郎といふものさ」
八五郎はさう言つて、グイと長んがい顎あごを引いて見せました。

「道理で——」

百姓男は感に堪たへた顔をするのです。

「御挨拶だね、何か用事があるのかい」

「江戸開府以來といはれた捕物の名人にしちや、少し變だと思ひ
ましたよ。悪く思はないで下さいよ」

「言ふことが一々丁寧で腹も立てられねえ」

相手が正直過ぎて、八五郎のガラツ八も大たじくでした。

「八、何をして居るんだ。お客なら早く取次ぐが宜い」

平次は奥から聲を掛けます。奥と言つても入口の三疊の隣の六

疊。首を伸のせば、格子の外に立つた客の睫毛まつげも讀めさう。

こんなやり取りがあつて、客の百姓男は漸やうやく中へ通されました。

疊の上へ眞四角に坐ると、座布團から膝が二三寸はみ出して、その上に置いた手が、八つ手の葉のやうにでつかいのも、何となく大地の子らしい人柄ひとがらを思はせます。

「錢形の親分さんで御座いますか。私は柏木かしはぎの在の者で、百兵衛と申しますが——」

百姓男は慇懃いんぎんに挨拶しましたが、八五郎に氣を兼ねたものか、容易に用事を切出しません。

「これは八五郎と言つて俺同様の男だ。遠慮なく話すが宜い。一體どんな用事で柏木から遙はる／＼々々來なすつたんだ」

平次はもどかしさうに誘ひさその水を向けます。

「それぢや申しますが、實は親分さんに御願ひがあつて参りました」

「――」

「外ぢやございませんが、親分の智恵でこれを一つ判じて頂き度いんで」

百兵衛はさう言つて、内懷ろから鬱金木綿うこんもめんの財布を出すと、中から大事さうに疊んだ紙片を拔取り、その皺しわを寧丁に膝の上に伸して、平次の方に押しやるのでした。

紙片は半紙を四つに切つて、それに禿筆ちびふでで書いたもの、

ほうきからたつみ

かまのはなからひつじさる

くわのみみからいぬゐ

くちのなかのめ

斯^かう讀めます。

「フーム」

平次もさすがに唸^{うな}るばかり。

「親分さん、これを何と解いたもので御座いませう」

「^{はうき}箒^{たつみ}から辰巳、鎌の鼻から未^{ひつじさる}申、^{くは}鍬の耳^{いぬゐ}から戌亥、口の中の

眼——と讀むんだらうな。どうだ分つたか、八」

平次の智恵もこの謎には持て餘しました。

「自慢ぢやねえが、薩^{さつぱ}張りわからねえ。——どうかしたら、箒だ

の鎌だの鍬だくはのつて、お百姓の道具調べちやありませんか」

「鎌の鼻や鍬の耳なんか百物語へ出て來さうだぜ」

「鍋の耳に、五徳とくの足なら分つてゐるが——」

「馬鹿だなア。——お聴きの通りだ百兵衛さん。この判じ物は、こちとらの智恵ぢや解けさうもないぜ。寺小屋の師匠か、うらなひ占物しやに持つて行つちや何うだ」

平次は到頭投げてしまひました。

「それもやつて見ました。村の手習師匠にも、菩提寺ぼだいじの和尚にも、左門町の白井白龍先生にも見て貰ひましたが、まるつきり見當がつきません。此の上は江戸一番といふ——」

「それは止してくれ。この平次は唯の岡つ引きだ。學者や易者えきしや

に分らないことが分るわけはねえ。ところで、この謎々を解けば、一體どんなことになるんだ」

「そいつは申上げてても仕様が御座いません。ほんの内ないしよごと證事で。

——それぢや、親分さん、これでお暇いたします。大きにおやかましう御座いました」

百兵衛は謎々の理由を訊かれると、餘つ程それが言ひ度くなかつた様子で、挨拶もそこく、逃げるやうに外へ——不器用な恰か好で飛出してしまひました。

「ありや何ですえ、親分」

「わからないよ」

「親分の智慧を試しに、何處かの人の悪い奴が、わざとあんな風

をして來たんぢやありませんか」

八五郎はそんな事まで氣を廻すのでした。

「馬鹿なことを言へ、あれは眞面目なお百姓だよ。あの柄がらこしらは拵へものぢやない」

この不思議な訪問者が、やがて恐る可き事件の豫告とは平次も氣が付かなかつたのです。

二

「錢形の親分、遠方で氣の毒だが、柏木まで行つてくれまいか」
 柏木の寅とらきち吉といふ、顔の賣れた中年者の御用聞が、神田の平

次の家を訪ねて來のは、それから二十日餘りの後——正月の松が
取れたばかりの、ある日の晝近い時分でした。

「柏木の親分の頼みなら、何處までも出掛けるが、一體どんな用
事なんで——」

平次は案外手輕に乗り出すのです。ろくな御用始めもなく、
少し腐くさつてゐた矢先でもあつたのでせう。

「十二社の近そう所に、榎井山左衛門といふ大名主があるが、苗字めうじ帶
刀いたうまで許された家柄いへがらで、主人の山左衛門は三月ばかり前にポ
ツクリ亡くなつた——」

「——」

「卒中だといふから、それに不思議はないが、遺言ゆうごんをする間も

ない急死で、代々だいく櫓井家に積んである筈の何千兩といふ金の行方がわからない。尤ももつと地所も家屋敷も貸金もうんとあるから、別に當座不自由をするわけではないが、困つたことに甲府送りの公儀御用金を五千兩ほどお預りしてあるので、春早々それを返さなければならぬ。いかに柏木一番の長者でも、差迫つて五千兩の工面は容易でないから、暮からこの春へかけて櫓井家は毎日煤掃すすはきのやうな騒ぎだ」

「フーム、それから」

話は大分面白さうで、平次も膝を乗り出しました。

「櫓井家に傳はる金と、公儀から御領りの金、併あはせて一萬兩近いものが、何處かに隠してあるに相違ないといふが、三月の間捜し

抜いてもどうしても見付からない。——ところで、この騒ぎの眞つ最中、昨夜若旦那の福松が死んだのだ」

「？」

「屋敷の裏で、崩れた石垣に打たれて死んでゐるのを、今朝往來の人が見付けた。鍬なんかを捨ててあつたところを見ると、石垣を掘り崩して、先代の親旦那が隠した金でも捜してゐたのかも知れない」

寅吉は前後の事情を詳しく説明して、平次の智恵を借りに來たのです。大公儀が甲府勤番の諸士を賄ふために用意した五千兩の大金、柏木で紛失してしまつたでは、土地の御用聞の寅吉の顔が立たなかつたのです。

「ところで柏木の親分、少し訊き度いことがあるが——」

話を聴き了つた平次は改めて訊ねました。

「何だえ、錢形の」

「柏木に、百兵衛といふ男がゐないだらうか、三十五六の大きい百姓風の——」

「それは櫛井家の作男だよ。亡^なくなつた先代の山左衛門が、自分の子のやうに可愛がつた男だ。一國者で少し扱ひ悪いが——」

「よしツ、行かう」

平次は百兵衛が櫛井家^{ならゐ}の作男と聞くと、急に乗出します。

「行つてくれるか、有難い。それぢや明日でも——」

「いや、その福松とかいふ若主人の死骸を見て置き度い。これか

ら直ぐ出かけよう」

平次は直ぐ支度をする、居合はせたガラツ八と三人、神田から柏木まで、近からぬ道を急いだのです。

柏木に着いたのは、幸ひにまだ日暮れ前。

「有難い。陽のあるうちに見て置き度いものが澤山あつた。家中へ入る前に、ざつと外を調べて置かう」

平次は櫓井家の門を入ると、家の中の騒ぎには眼もくれず、其の足ですぐ庭から井戸端へ、畑へ、塀へいから石垣へ、その外そとの産うぶす土神ながみの小さい森へ、肥料溜ひれうだめから空井戸へ、物置から裏の流れへと、暮れて行く陽の光を惜をしむやうに、大急ぎで見廻りました。

「若旦那が死んでゐたのは此の邊だよ」

寅吉は低い石垣の下に立ち止りました。

「人間の背より低い石垣が崩れて、その下敷したじきになつて死ぬのは變ぢやないか。石垣の下へ腹ん這ひにでもなつて居るところへ、上から石を轉がして落さなきや——」

若旦那福松の死骸を見る前に、平次は早くもその死に對して一脈の疑ひを挾はさんだのです。

「だが、此の通りの血だぜ」

「そいつは後からでも附けられるよ」

平次にさう言はれると、寅吉はその明智に承服しないわけには行きません。

「おや？ 石垣の石が一つ足りたないが——」

平次は石垣の崩れと、その下に轉がつた石とを目分量で勘定して居りました。

「最初^{はな}つから石が不足ぢやないのかな」

「いや崩れた跡^{あと}が三つで、下に落ちて居る石は二つだ」

「一つは上にあるだらう」

「上にもない——おや、變なことがあるぞ。畑をひどく荒してゐるが——。霜^{しもばしら}柱^{くだ}をこんなに碎いて、土を掘つて何處かへ運んだ様子だ」

「フーム」

「行つて見よう。——その井戸の中が怪しい。井桁^{ゐげた}の下まで泥だらけだ」

「そいつは空井戸だ。中には水はない筈だ」

「水はないが、井戸の中に眞新らしい土がうんとあるぜ。——石も投り込んであるやうだ。あの土に霜しもばしら柱ちゅうの碎くだけたのが交つて、石に血が付いてゐると大變なことになるが——」

平次のさう言ふ顔色を讀むと、ガラツ八はつい目と鼻の先の物置に飛んで行つて、三間梯子ぼしごを輕々と引つ擔かついで來ました。

「まだ中が見えるだらう、入つて見ませうか親分」

「さうしてくれ」

ガラツ八は平次の答へも待たず、空井戸の中に梯子をおろすと、一應落着き工合を調べる間もなくスルスルと降りて行きました。

「どうだ、八。土は？」

「新しい畑の土だ。霜柱がザクザク交つてますぜ——井戸の中の霜柱なんか話の種だ」

「それから石は？」

「あつ、血」

八五郎の聲は井戸の上まで、無氣味に響きます。併し^{しか}それで十分でした。若旦那の福松は、昨夜^{ゆうべ}夜中に起出して、この井戸の中に突き落され、——或ひは自分から入つたところを——上から石を投げ込まれて惨^{ざん}殺^{さつ}され、死骸は曲者の手で引上げられて、少し離れた石垣の下で怪我死をしたやうに偽^ぎ装^{ざう}されたのでした。

その後へ畑の土を投げ込んだのは、空井戸の中を覗いた位では、血の跡も見えないやうに細工したのでせう。さう思つて見れば、

朽ちかけた井桁あげたに、微かすか乍ら泥足の跡が附いて居ります。

「恐ろしい足跡ぢやないか」

寅吉その寸法を測はかつて居ります。仁王様の草鞋わらぢのやうな跡が、夕陽を受けてどうやら斯かうやら讀めるのでした。

「もう一度引返して見よう」

三人は黙りこくつて畑の中を石垣の下まで引返しました。陽はすっかり傾かたむいたせるか、霜柱を碎いた足跡が、先刻よりは濃い凹いんえいみの陰影を作つて、はつきり見えるのです。

「大きい足跡と小さい足跡とあるやうだ。小さいのが殺された若旦那で、大きいのが下手人のだらう」

「斯んなでつかい足跡が減多にあるわけはねえ。十二文半甲高と

いふ足を捜^{さが}すんだね」

さう居ふ寅吉は、胸の中に百兵衛の大きい身體と、その拔^{ぼつぐん}群の手足を考へて居るのでした。

其處から納^{なや}屋へ行つて見ると、軒^{のき}の下に仁王様の草鞋のやうなのが十足ばかりブラ下げてあり、そのうち三足には明かに新しい足形が附いて居ります。

「百兵衛のだ」

寅吉は眞つ先に立つて納屋の中へ入つて見ました。中にはこれも眞新らしい半^{はんしめ}濕りの泥の附いた鍬^{くは}が一挺、それに頭の上には井戸替の時にでも使つたらしい手頃の麻^{あさ}繩^{なは}が二三本輪にして掛けてありますが、その一本には、明かに血潮らしいものを、泥で

拭ひ取つた跡がはつきり附いてゐるではありませんか。

三

家の中へ入ると、ならぬ榎井家は打續く不幸にすつかり滅入めいり乍らも、
お葬とむらひの支度やら、てうもん弔問の客などで、何となくザワザワして居
ります。

寅吉の姿を見て一番先に驅けて來たのは、甥をひの千次郎といふ二
十七八の男でした。

「親分、御苦勞様で」

「千次郎さん、錢形の親分が來てくれたよ。此方は八五郎兄哥あにいだ」

「それは、どうも」

千次郎は少しばかり腑ふに落ちない顔をして居ります。

「若旦那の死にやうが變つてゐるし、それに一萬兩といふ大金も捜さなきやならない」

「へえ——」

ツケツケ言ふ寅吉の顔を、千次郎は不足らしく見て居るのです。

「ところで、百兵衛は見えないやうだが」

とむら

「葬ひの支度で、新宿まで小買物やら使ひやらに行きましたよ」

「あの男は亡くなつた大旦那に可愛がられたといふが」

平次は横から口を出しました。

「どういふものか、あの變人へ目をかけましたよ。大旦那の物好

きでせう」

「若旦那は？」

「これは百兵衛とは性の合はない方でした。何しろ一國者で、稼かせぐより外に道樂のない百兵衛から見ると、揚弓、雜俳ざつばいから茶屋遊びと、道樂強い若旦那の仕打が氣に入らなかつたのも無理はありません。百兵衛は主人に向つて遠慮のないことをツケツケ言ひましたよ」

千次郎の調子には、百兵衛を物の數とも思はない口吻こうぶんの裏に、妙に反感らしいものが響くのでした。

そんな話をしてゐるところへ番頭の喜之助が顔を出しました。四十五六の、一理窟りくつこねさうな男で、千次郎よりは、一段と扱ひ

にくさうですが、身體は二人とも立派で、忙しい時は、作男の中に交つて、田圃たんぼの仕事位は出来さうです。

「おや、親分さん方」

「取混とりこみのところを氣の毒だが、錢形の親分が、どうしても一萬兩の金を今日明日中に見付けてやらうと言ふんだ」

と寅吉。

「それは有難いことで。さうして下さると、櫓井の家名も疵きずがつかずに済みます」

「ところで、若旦那の死骸を見せて貰ひ度いが――」

「へえ、どうぞ」

喜之助に案内されて、三人は奥の一間に通りました。型の如き

屏風びやうぶの中に、北枕で若旦那の死骸が横たへてありますが、線香をあげて膝行みざり寄つた平次は、たつた一目で、井戸の中で、三間以上の高さから、十貫目もある石を叩き付けられた死骸に相違ないと見てとりました。まことに二た目とは見られない、慘憺さんたんたる死にやうです。

「親分さん、御覽の通りで御座います。弟の敵を取つて下さい、お願い——」

そつと平次の横で囁ささやいて、ワナワナと顫ふるへる手を合せるのは、三十前後の年増女。あまり綺麗ではありませんが、鄙ひなびた中にも品のある女でした。

「姉さんのお稲さんだよ」

寅吉は、後ろから言葉を添へます。惨死した福松の姉で、今では櫛井家にたつた一人残る娘。一度縁付いたが、夫に死なれて離縁になり、櫛井家へ歸つたのだ——とこれは後で聴きました。

もう一人、お稻の後ろに引添ふやうに、美しい顔を俯向^{うつむ}けて居るのは、お由といつて先代の配^{つれあひ}偶の遠い姪^{めひ}で、十九になつたばかり。福松に娶^{めあは}合せるといふ噂もありましたが、そのまゝに流れてしまつたやうです。

福松は道樂者で通人ではあつたが、恐ろしく醜^{ぶをとこ}男で、お由の氣に入らなかつたらしく、お由はまたお人形のやうに綺麗ですが、福松から見ると野暮つたい泥臭い娘に過ぎなかつたのでせう。

「皆んなの寢部屋を見せて貰ひ度いが——」

平次はいきなり變なことを言ひ出します。

「へえ、どうぞ」

案外氣輕に案内してくれたのは、甥をひの千次郎でした。

何分お城のやうな大きな家で、寢部屋なども下女二人は別ですが、あとは銘めい々くのを存分に、一部屋づつ取つてあります。その銘々の寢部屋がまた、百姓家の香氣さでろくな締りもなく、それぞれ勝手に外へ出られるやうになつて居りますから、夜中に外へ出ようと思へば、誰でも人に知られずに勝手に出られるわけで、此の點では二人の下女の外には、家中の者で『現場不在證明』テリバイを持つてゐる者は一人もありません。

最初に見たのは番頭の喜之助の部屋。押入から布團を引出すと、

中から、ポロポロと生なまじめ濕りの土がこぼれ落ちるではありませんか。

「あ、これは？」

寅吉は氣色ばみましたが、平次は素知らぬ顔で、その土塊くれを集めて鼻紙に包みます。

次は千次郎の部屋。此處も押入の布團の中は、かなりの泥で、畑の肥料の交つた生濕りの黒土は、少し位揉もんだところで、容易に落ちません。

お稻とお由の布團にはさすがに泥は附いてゐませんが、作男の百兵衛の乾し堅めたやうな煎餅布團せんべいぶとんなどは、ザクザクするほどの泥が入つて居ります。

錢形平次は泥の紙包みを三つ拵^{てこぎ}へて、ひどく面白さうでした。案内の千次郎は呆れ返つて物も言ひません。

四

百兵衛が歸つて來たのは、すつかり暗くなつてからでした。平次はそれを縛らうとする寅吉を無理に物蔭^{ものかげ}に連れて行つて、

「柏木の親分。百兵衛を縛り度いのは尤^{もつと}もだが、證據が揃ひすぎ

て腑に落ちないことばかりだ。暫く待つてくれ」

「だが錢形の親分。萬一逃げられちや——」

「いや、それは大丈夫だ。——若旦那殺しの下手人を舉^あげるのも

大事だが、俺は今晚中に一萬兩の金を搜し出して見せるよ」

「本當かい、それは？」

平次の大言に驚いて、張り切つた寅吉も暫くは百兵衛を見送る氣になりました。

「又逢つたね、百兵衛」

「あツ、錢形の親分さん」

いきなり灯の中へ顔を持つて行つた平次。それを見た百兵衛の面喰ひやうはありませんでした。

「大層驚くぢやないか」

「親分が此處に居なさるとは思ひません」

「ところで、いろ／＼訊き度いことがある。

提ちやうちん灯あかりを點けて、

納屋へ來てくれ」

「へえ——」

百兵衛はこの平次の變つた望みにしたが従ふ外はありません。

その間に平次はガラツ八の八五郎を呼んで、

「八。菩提寺の和尚と、村の手習ひ師匠と、左門町のうらな占ひ者白井

白龍に逢つて、百兵衛の外にあの不思議な謎々の文句の判じ方を
聴きに行つたものはないか、訊いてくれ。歸りには寅吉親分の家
で落合ふことにしよう」

「それぢや、親分」

八五郎は宵闇の中を飛んで行きました。

百兵衛に提ちやうちん灯あかりを持たせて、納屋の中へ入つた平次は、

「この草鞋は皆んなお前が履いたのか」

「へえ——」

「よく數を勘定してくれ」

「おや、さう言へば一足汚れたのが多くなつてますよ。二足だけしか履かなかつたが——」

百兵衛は腑に落ちない顔をして居ります。

「ところで、あの謎々の文句だが、あれは何處から出したんだ。今となつては言つた方が宜からう。——若旦那の福松はあの文句のために殺されて居るんだ」

「えッ、本當ですか、それは親分」

「俺は嘘は言はない。その疑ひがお前にも懸つて居るぞ。見るが

宜い、寅吉親分は何時縛つたものかと考へて居るぢやないか」

「言ひますよ、親分。——それは半歳ほど前に亡くなつた大旦那から預つたもので——」

「その時大旦那は何と言つた」

「福松は放埒はうちつだから、うつかり大金の隠し場所を教へるわけに

行かないが、俺も取る歳だ。此の頃のように身體が弱つちや、何時どんな事があるかも知からない。そこで一生懸命工夫を凝こらして

此の謎々を拵こしらへたよ。萬一の用意に福松に一枚、お前に一枚預けて置く。俺の身體に若しもの事があつたら、その謎々を解いて一

萬兩の金を出し、半分は御役所に返し、半分は櫓井しんしやうの身上しんしやうの爲にしてくれ。見る人が見れば必ず分る筈だ——と斯かう仰有いま

した」

「すると福松もそれと同じ謎々を書いた紙片を一枚持つて居たのだな」

「それに相違御座いません」

「死骸も手廻りの品も見したが、そんなものはなかつたぞ」

寅吉は口を容いれました。

「誰が盗つたんでせうよ」

「若旦那と一番懇意こんいにしてゐたのは誰だ」

平次は言葉を改めます。

「浪人の北田浅五郎様、やつとうの先生ですが、やつとうより雑ざ俳つばいが上手で、若旦那と無二の仲でしたよ。今晚もお通夜に見え

てゐますが——」

「家の者では」

「番頭さんでせうか、千次郎さんでせうか」

これは百兵衛も見當がつきません。

「ところで、先代の山左衛門旦那は百姓仕事が好きだつたのか」
 「へえ、それはもう。この大身代の大旦那様ですが、三日も鋤くはを
 持たずに居ると、氣分が悪いと仰有つて、よく私と一緒に野良のらへ
 出ましたよ。よく出來た方で——」

百兵衛は自分の仕事に理解のあつた先代の主人を偲しのんで、つい
 濕しめつぽくなるのでした。

「その大胆だ那なが使つた鎌かまと鋤くはがある筈だ。見せて貰もらはうか」

「これで御座いますよ。親分さん」

百兵衛はいそくと納屋の壁に打ちつけた横木から、鋏と鎌を外して持つて来てくれました。どつちもよく洗つて磨いて、刃先はピカピカ光つて居ります。

「物尺ものさしを貸してくれ。どれく、鎌の柄えは二尺五寸か、鋏の柄えは三尺八寸、それでよし」

平次は納屋に備付そなへつけた粗末な物尺で、鎌と鋏の柄の長さを計り乍ら續けました。

「もう一つ訊くが、その泥だらけな鋏はどうしたんだ」

「あ、又か。使つたら洗つて置け、洗はなきや錆さびるからつてあれほと言つて置くのに」

百兵衛はブリブリし乍ら、泥だらけな鍬を取おろして、納屋の外へ持出してゴシゴシやつて居ります。

五

母屋^{おもや}へ引返すと、お通夜の人が大分集つて、中には福松と無二の間だつたといふ、浪人北田淺五郎なども交^{まじ}つて居ります。

平次は家中の者の居る中でいきなり、

「百兵衛、——^{はうき}箒^{たつみ}から辰巳——といふ謎々の文句の箒はこれだよ」

と土^{へつ}竈^いの前、荒^{くわうじん}神^{ぼしら}柱の側に置いてある荒神箒を指すのでした。

「――」

多勢の眼は、平次の指先の荒神箒から辰巳の方角へ動きます。其處は眞直ぐに門口で、闇の中には廣々と畑が展^のべられて居るだけ。

「鎌の鼻――か、面白いな。ところで寅吉親分、斯^かう暗くなつちや、鎌や鍬で寸法を取つて歩くのも厄^{やく}介^{かい}だ。今晚は親分のところへ厄介になつて、明日の朝うんと早く來て見るとしようか」

「宜いとも。ところで、一萬兩は大丈夫か」

寅吉は人の聽く耳を憚^はつて、平次の傍に摺^すり寄ります。

「大丈夫とも、もう手に入つたも同様だよ」

こんな大きな事を言ひ乍ら、平次と寅吉はつい淀橋^{よどばし}の近所の

寅吉の家へ引揚げました。

「親分、分りましたよ」

其處に待つて居たのはガラツ八です。

「お寺か、うらなひしや占者か」

「占ひの白井白龍のところへ、今朝あの謎なぞを持つて行つた者があ
りますよ」

「女だらう」

「えらいツ、さすがは親分だ」

「おだてちやいけない」

「お高祖頭巾こそづきんを深く冠かぶつた若い女で、中へ通らずに、いきなり見
料に小判を光らせて、あの謎を見せたと見ふんで——」

「白龍は何と解いた」

「分らなかつたさうですよ」

「はうき たつみ

かま

ひつじさる

「箒の辰巳で、鎌の未申——なんてえのは三世相にもないよ。

ところで一寢入りして出かけようか」

平次は寅吉の家へ泊り込みましたが、眞夜中頃になると、いきなり飛起きて支度を始めるのです。

「何處へ行くんだ、錢形の」

「丁度夜半のお經きやうが濟んだ頃だ。曲者が今頃動き出してゐるぜ」

十分に支度をして出て行く平次の後から寅吉と八五郎も跟ついて行く外はありません。

何時の間に此の邊の案内を見て置いたか、平次は大して迷ふ様

子もなく、眞暗な畑の中へぐんぐん入つて行きました。

「しつ、靜かに」

何やら畑の中に蠢めく者——。平次はそれを見ると、半分は身振りで三人を三方に分け、網を次第に絞つて行きます。

物の影がそれに氣が付くのと、

「御用ツ」

八五郎が飛付くのと一緒でした。

灯りの中へ引立てて行くと、それは甥をひの千次郎の忿怒と悔恨かいこんとに歪む顔ゆがだつたのです。

驚き騒ぐ家人の中から、おどくするお由を見付けて、それも寅吉に縛らせ、

「まだ眞つ暗だ。一と休みしてから金は搜すでしょうか」

平次は落着き拂つて、夜の明けるのを待ちます。

「金は何處に隠してあるんだ。錢形の」

寅吉はたまり兼ねて訊きました。

「もう種^{たね}を明かしても宜いだろ、謎の文句を俺は斯^かう解いたんだ。

——箒^{くわうじんぼうき}は荒神^{かま}、それに變りはない。其處から辰巳^{たつみ}（東南）

の方へ二尺五寸の鎌^{かま}の柄の寸法で五十六だけ、つまり百四十尺行

く。鎌の鼻といふのは鎌^{はな}の八七、七と八を掛けて七八の五十六だ。

千次郎はそれを八十七と思ひ込んだから、飛んでもない方へ行つてしまつた」

「——」

「百四十尺——二十三間と二尺行くと向うの生垣に突當る勘定だ。其處から^{くは}鍬の柄三尺八寸の寸法で三三が九つ、つまり二十四尺二寸だけ^{ひつじさる}未申（南西）の方へ行くと、其處に大きな^{すていし}捨石が一つある。その戌亥^{いぬゐ}（西北）が空井戸だ。口の中の眼といふのは、井戸の中に何か仕掛けのあることだらう」

平次の謎解きはまことに見事でした。夜が明けると直ぐ、その通り^{たど}辿つて見ると、果して昨日の空井戸に突き當り、空井戸の中を調べると、中程のところに二つ、はめ込みの石があつて、それを抜くと、大きな横穴が口を開くのでした。穴の中に一萬兩の金^がが隠してあつたことは言ふ迄ありません。

×

×

×

一件がすつかり落着してから平次は、ガラツ八の爲めに斯う説明してくれました。

「千次郎とお由は福松を騙だまして空井戸につれ出し、其處に眞物ほんものの一萬兩の金が隠してあるとも知らず、此の中に一萬兩あるとか何とか出鱈目でたらめを言つて福松を殺したのさ。謎々を書いた紙を福松の死骸から奪とつたが、さてこれを解きやうはない。そこでお由を白龍のところへやつたんだらう。自分の寢床に昨夜の泥が附いてゐると氣が付いて、百兵衛と喜之助の寢床にまで泥をつけた千次郎の悪智恵も、謎はどうしても解けなかつた。俺が荒くわうじんばうき神しん箒しきから辰巳たつみの方へ、鎌かまと鍬くはの柄えで寸法をとる話をする、千次郎は鎌の柄の八十七倍と鍬の柄の三十八倍と見當をつけて、飛んでも

ない方へ行つて捜してゐたんだ。丁度そこを捕へたから言ひ譯が立たないのさ。だが、あの百兵衛といふ男は良い男さ。お稻いねの聲むこに世話をしようと思ふがどうだらう」

平次のこの目論見もくろみは、間もなく實行されました。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第十八巻 彦徳の面」同光社磯部書房

1953（昭和28）年10月20日発行

初出：「文藝讀物」文藝春秋社

1944（昭和19）年1月号

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2016年3月17日作成

2017年3月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

錢形平次捕物控

荒神箒

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>